

人の一生は出会いと運によつて左右されると、この年になるとつくづく感じて居ります。主人が台湾の皆様は何時まで心の中に止めていただける幸いをいただいた事も、偶然の出会いに始まった事と申すより外ありません。

思えば六十年前から始まった池上一郎と竹田の方達との交友が絶える事なく今迄続き、一郎亡き後池上一郎文庫として皆様に残していただいて、交友の場として文庫を利用して下さっている事等、私は感謝以外申上げる言葉はございません。主人は生きていた時から言葉数の少ない人でしたが、竹田の皆様方の御親切は亡くなる迄感謝致しております。物質の極端に少ない時代でしたのに御地で部下の方々も含めて皆様に親切にいただいた事、時々村の方のお宅におよばれしてご馳走になった事等、余り口外できなかった事なのでしょうか？ポツリとなつかしそうに口にして、後は無言で一人で思い出をかみしめておりましたらから。

今こうして皆様にお手紙を差し上げる事があるなら、もっと根ほり葉ほり聞いておくべきだったとくやんでおります。ましてやあの当時御地こそ何事もなかったのですが、内地でも外地でも戦争の真つただ中に居る人達の苦しみは大変な時でしたのに、部隊一同御地の皆様の御厚情の中で平穩無事に時を経て池上文庫に名を残していただいた事、自分でどう整理していいのか彼の無言が私には分るような気が致します。感謝より無かったと思います。

本当に有難うございます。文庫が末永く竹田の皆様によりよき交友の場として続きます事を心から願つてお礼の言葉を添えて終らせていただきます。

かしこ

池上 ゑみ子

平成十六年一月十六日

池上一郎文庫会員御皆様